

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第238号 2013年11月9日

OCHADAI GAZETTE Autumn, 2013



写真：お茶の水女子大学写真部

「女性の力を、もっと世界に。」

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|---|--|
| 学長からのメッセージ…………… 1-2
お茶の水女子大学のグローバル化教育
「女性の力を、もっと世界に。」 | 教員紹介…………… 10
● 浜口 順子先生
(人間文化創成科学研究科人間科学系) |
| 卒業生紹介…………… 3-4
● 黒田 玲子さん
(東京理科大学教授、東京大学名誉教授) | 附属学校園からのお知らせ…………… 11-12 |
| 学生のアクティビティ①…………… 5-6 | キャンパス点描…………… 13-14
● オープンキャンパス2013を開催
● 第7回女子中高生のための
サイエンスフェスティバルを開催
● 小野亜美さんがグローバル人材育成推進セン
ターロゴマークデザイン賞を受賞 |
| 学生のアクティビティ②…………… 7-8 | |
| 本学の新しい取り組み…………… 9 | |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

お茶の水女子大学のグローバル化教育 「女性の力を、もっと世界に。」



グローバル人材育成推進事業キックオフシンポジウム (2013年2月28日～3月1日)

およそ70%のお茶大生が留学したいという希望を持っていることが学生アンケート調査でわかりました。「内向き志向」などとよくいわれますがお茶大生には当てはまらないようです。

実際に留学経験をしている学生の割合は、短期長期を合わせて学部生では10%、大学院生では11.2%というのが現実です。

アンケート調査の数字と現実との乖離の要因はさまざまに推測できますが、主なものとしては語学力、経済的な負担、学事日程があります。

留学を困難にしているこれらの要因を出来るだけクリアすることがとくに重要だと考えています。

まず、語学力の強化については、今年度から新たな教育プログラム、ACT (Advanced Communication Training) プログラムを開始しました。これは、プレゼンテーション、ライティング、ビジネス英語、資格英語などの実践的なプログラムです。本学に入学した学生の語学力は極めて高く、語学力の向上が大いに期待できます。

また、経済的な理由で留学を断念することのないように、留学支援のための基金の設立を予定しています。

さらに、2014年度からは学事日程を変更して、より効果的に海外で学びやすくするために4学期制の導入を決定しました。

[グローバル人材育成推進事業]



グローバル人材育成推進事業のシンボルマーク
(学内コンテストによって決定)

グローバル教育強化のきっかけは、2012年度に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」(全学推進型)として本学の提案が承認されたことにあります。この事業に採

択された国立大学は、北海道大学、東北大学、千葉大学とお茶の水女子大学の四大学だけでした。

本学のプログラムでの人材像は、多言語能力とIT技術を有し、他文化を理解し、さらに、変化する社会状況を適切に捉え対応できる人材です。

グローバル化する世界で活躍するためには、多様な文化を理解する力が必須です。また、単に語学力だけでなく、課題を発見し解決する基礎的能力が十分に訓練されていなくてはなりません。そのために、お茶の水女子大学では、「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」と「複数プログラム選択履修制度」を導入しました。これは、「深い教養」と「広い専門性」を修得するシステムです。

さらに、この事業を推進するために教育環境も整えつつあります。

ACTプログラムの他に、サマープログラム、インターシップ、スタディーツアー、GREAT-Ochaプログラムを実施し、学修支援情報プログラムなど学生が主体的に学び鍛えるための環境を整備しています。

そして海外の大学でより多くの学生が学ぶことのできるように、協定校を4年間で24大学増やし、現在では54の大学と協定を結んでいます。

今年春に本学で行ったグローバル人材育成推進事業のシンポジウムには、協定締結大学から約80名もの教員や学生が参加し、本学のプログラムは大きな関心をもたれました。さらにその成果は、今年度のサマープログラムへの参加者数の増加に顕著です。

[グローバル人材育成の二つの柱]

グローバル人材を育成する国立の女子大学として、今回の事業のために「女性の力を、もっと世界に。」を標語として掲げました。この標語は、「グローバルな視点をもちリーダーシップを発揮できる女性を育成する」という本学の決意の表明でもあります。つまり、グローバル教育とリーダーシップ教育の二つです。

これまで、本学のグローバル教育は、グローバル教育センターとグローバル協力センターがその役割を担ってきました。

グローバル教育センターは、学内共同教育研究施設として2001(平成13)年に設置された留学生センターを前身とし、その後、国際教育センター(2005～2008年)を経て、2008(平成20)年に現在のセンターとなりました。

グローバル協力センターは、開発途上国女子教育協力センターを前身とし、女子教育を通じて国際協力を促進する活動拠点として2003(平成15)年に設置されました。このセンターでは、「女子教育協力研究」と「幼児教育協力研究」を主な活動としてきましたが、現在はより広く国際協力活動とそのための教育活動を担っています。

他方、リーダーシップ教育は、2008(平成20)年にリーダーシップ養成教育研究センターを設置して強化しています。

本学が目指すリーダー像は、各人が属する組織を担い、機動させることのできる創造的なリーダーです。そのために、「知性」「心遣い」「しなやかさ」をリーダーシップ教育の理念としています。高等教育機関で学ぶ者には、確かな知識の修得は必須の条件です。その上で、他者を尊重し理解できること、変化する状況に自信をもって適切に対処できる能力を身につけて欲しいと考えています。

リーダーシップ養成教育研究センターでは、学外から講師を招いて授業を実施しています。

また、2011年度からは、毎年国際シンポジウムA-WiL(International Research Program for the Advancement of Women in Leadership)シンポジウムを行ってきました。第一回のシンポジウムは、女子大学の国際的ネットワークを基盤として、「未来を創造する大学」をテーマに、翌2012年度には、国際的に活躍する女性とグローバル企業の経営者を招いて「グローバル女性リーダーが未来を創る」というテーマで実施しました。

これらのシンポジウムを通して、学生は、国際社会で活躍することを身近に感じ、そして具体的なキャリアイメージを描ける、と好評です。



A-WiL シンポジウム (2012年2月)

このように、本学ではリーダーシップ教育を基盤にグローバル化教育を行っています。

【グローバル化についての考え方】

今から110年前、1903(明治36)年に、現在のタイ王国から4名の女子を留学生として受け入れたことが本学の国際交流の第一歩といえます。このことは、本学が女子教育の場としての役割を担い続けてきたことを象徴しています。



シヤム国(現・タイ王国)からの留学生

そしてこれまでに、多くの留学生を受け入れ、また、国際的に活躍する多くの卒業生を輩出してきましたが、今から11年前、2002(平成14)年には、途上国女子教育支援として「アフガニスタン女子教育支援」を開始しました。

この活動の開始を記念したシンポジウムでは、本学名誉博士の緒方貞子氏も基調講演をされました。そしてこの時、お茶の水女子大学は国際化の方向性を明確に示しました。それは、単に語学を上達させて海外と交流するだけではなく、どのような地域に生きる人々、どのような文化をもつ人々とも「共に生きる努力をする人」を育成することです。

現代の社会において、グローバルに活躍する人を大学が育てることの意義は、それぞれの文化や社会の在り方を超えて、「共生の実をあげる人を教育する」ことにあると考えています。

女性の社会的活躍が期待され、グローバル化している状況の中で、国立の女子大学としての役割は、単にグローバルに活躍し、リーダー的役割を担う人材の育成では不十分です。今、お茶の水女子大学では、多様な文化を理解し、「共生の実をあげる人」を育てること、そして、新たな価値を創造して、社会に真の豊かさをもたらすことのできる女性リーダーを育成したいと考えています。

お茶の水女子大学長
羽入 佐和子

お茶の水女子大学のグローバル化教育 学長からのメッセージ

卒業生紹介

世界をリードする女性科学者、黒田 玲子さんに聞く

学長インタビュー

国立の女子大としてお茶の水女子大学の使命のひとつは、グローバルな視点をもってリーダーシップを発揮できる女性を育てることである。今回は、世界で優れた業績を挙げた女性科学者に贈られる「ロレアル-ユネスコ女性科学賞」(2013年)受賞に輝いた黒田玲子さんを東京理科大学神楽坂キャンパスにお訪ねした。特別企画として、羽入佐和子学長がインタビューし、お茶大「広報アテンダント」メンバーの2名の学生

が同行取材を行った。黒田さんは自然界に見られる左右の非対称性に注目し、巻き貝の遺伝子の秘密を解明したことで知られ、その研究成果はアルツハイマー病の治療薬など応用研究への貢献も高い。インタビューではこれま

での研究活動や研究への姿勢などについて話をうかがった。この特集では、後輩の学生の目から特に印象に残った黒田さんの言葉をテーマに、学生たち自身が考えたことや感じたことを綴ってもらった。



羽入 佐和子学長(左)、黒田 玲子さん(右)



Kuroda Reiko 黒田 玲子

黒田 玲子さん

東京理科大学教授

東京大学名誉教授

1970年お茶の水女子大学理学部化学科卒、75年東大大学院理学研究科で理学博士号取得。

ロンドン大学、英国王立がん研究所を経て1986年東大教養学部助教授、1992年教授。2000年より、森・小泉・安倍内閣で総合科学技術会議議員、教育改革国民会議委員を務める。2012年東大を定年退任。2012年より現職。2008年より3年間、国際科学会議(ICSU)副会長を務め、2013年10月には、国連事務総長直属の科学諮問委員会メンバーに選出されている。

1993年猿橋賞受賞。2013年ロレアル-ユネスコ女性科学賞(物理科学)。

好奇心が服を着て歩いている

化学、生物化学、生物物理学、加えて研究するための装置開発。驚くほど広範囲の領域にわたって研究を広げてきた黒田先生。「好奇心が服を着て歩いている」と

喩えられることもある。幼少時代だれもが持っていた「なぜ?」と思う好奇心、その純粹な好奇心が今なお黒田先生の心には宿っているのだろうか。お茶大では化学を専攻した。好奇心旺盛な黒田先生の心を化学が射止めた理由はなんだったのだろう。意外にも、文理の選択で迷ったという。そんな中で理系に進路を決めた理由は「理系の勉強は大学に行かないと出来ない」と思ったからだ。わずか100個あまりの元素がすばらしい世界を作っていることに惹かれ化学を選んだ。もしついでにいけなくなったら文系に変わって頑張ろう、そんなことも

考えていたという。お茶大では、少人数のクラスでみっちり指導を受け、空いた時間には語学や他学部の授業も取った。「良い教育をしてもらった」と4年間を振り返る。

なんでもチャンスよ!

黒田先生のように夢を叶える秘訣はどこにあるのだろうか。「頑張れば道は必ず拓ける」。そう語る黒田先生自身もたくさんの困難を乗り越えて今に至っている。博士号取得後に英国に渡ったのも、当時は女性研究者には日本にポストがなかったからだ。ロンドン大学の研究員の契約は前任者の穴を埋めるためのもので、たった1年1ヶ月だった。当然、周囲は止めたという。それでも、黒田先生は単身渡英した。「なんでもチャンスよ。ダメだったらダメでもいい。何もやらないで人のせいになしたり、グズグズ文句を言ったりしていると絶対前に進めないのよ。どうすればいいのかを考えなきゃ。一生懸命やっていると必ず誰かが助けてくれるの」。研究がうまく進み、化学科から生物物理学科へと異動して研究分野を変えながら、そのまま11年を英国で過ごし、研究者として国際的キャリアを積んだ。英国



学生からの質問に答える黒田さん

の癌研究所でパーマネントポストも得ていたが、東京大学の助教授に採用され帰国した。

基礎がないと何も出来ません

基礎研究の大事さ、というのはよく耳にする言葉である。しかし、果たしてその意味を本当に理解できているのだろうか?「高齢者にとって優しい調理法は何か?という疑問から電子レンジは生まれません」と、黒田先生。言うまでもないが、直火を使わずに簡単に調理できるのは高齢者にとって優しい調理法である。しかし電子レンジはその必要性から生まれたものではない。マイクロ波の研究をしていく中で、これは料理に使えるか?と考えた人がいて、それが電子レンジにつながっていったのだ。まさにイノベーションである。だが、その発想が生まれるまでには基礎研究という大きな土台が存在しているのだ。「基礎がないと何も出来ません」。何度も何度も繰り返して、やっと身につくのが基礎である。基礎だけでは何も出来ないかもしれないが、基礎がないと何も出来ないのだ。学問だけでなく、あらゆる場面で「基礎が大事」と言われる。当たり前過ぎて、軽んじているところがあるのではないだろうか。

Think globally, act locally

世界的に活躍する黒田先生が考える「グローバル」とはどのようなものなのか。混同しがちであるが、インターナショナルとグローバルの意味は異なる。インターナショナルが国と国の間のことを指すのに対

し、グローバルはボーダーレスで国々をひとまとめにとらえる。それぞれの文化、宗教、歴史があつて国が成り立っている。もちろん、環境問題、科学技術分野などグローバルに対処しなければならない問題もある。しかし、世界を継ぎ目なくひと塗りに「グローバル化」出来るかといえばそうではない。「グローバル化を考える時に必要なのは“Think globally, act locally”」と、黒田先生は語る。世界全体のことを考えつつも実際の行動は足元に適したものになければならない。森全体のことを考えながらも、一本一本の木に対してはそれぞれに相応しい対応をしていく。どんなに電子レンジが発達しても、ジャングルの中にある村では薪に火をつけたほうが明らかに相応しいのだ。

考え抜いたとき無意識下にひらめきが生まれる

物事に真摯に取り組む姿勢は化学だけでなく、どんな学問にも必要なことである。「災い転じて福となす」の意味も改めて黒田先生から学んだ。「実験結果もそうでね、思った通りにいくのも嬉しい、でも思った通りにいかないのも嬉しい」「君はなんでも嬉しいんだね」と人に言われるのよ」と笑いながら先生はこうも続けた。「理系だけでなく文系もそうで、考えに考え抜いたときに無意識下にパツとひらめきが生まれる。考えるプロセスがないとダメなんだけど、心がゆるんだ時にひらめくの」。夢中になって取り組んでいるからこそ、やり続けるからこそ、ちょっとした瞬間のひらめきが大きな

発見に化けることもある。うまくいかないと、思い通りにいかないとやる気をなくしたり、逃げてしまいたくなることもあるかもしれない。しかし、そんなときこそが飛躍のチャンスなのだ。一生懸命に取り組むことの大切さを改めて感じた言葉であった。

研究者は一生をかける意義のある職業です

黒田先生の歩みは一本道ではなく、寄り道してぶつかって、その度に方向転換をしながら進んできたように見える。そしてなにより印象的なのは、黒田先生自身がその過程を楽しんでいることだ。自然の理に迫り、どこまでも真摯に向き合っていく。「研究者は一生を掛けられるくらい面白い意義のある職業です」研究者を目指すことに不安を感じる学生に向けて黒田先生は語る。「いろんな人に相談して、いろんなことを考えて、いろんな人に感謝していれば大丈夫。やれない理由なんていくらでもあげられるのだから、本当にやりたいことならやれない理由を言い訳にしないで、別の手段を考えて」数えきれない程の努力と苦労、そしてそれらに裏打ちされた経験と実績によって、文字通り「自分の道」を拓いてきた黒田先生。その言葉は私たち学生たちにとっての光となる。「まだまだやりたい研究がたくさんあるの」黒田先生の道はこれからも続く。

文責：我喜屋 早織(生活科学部3年)
渡邊 晶子(理学部2年)

わたしのオフタイム

なんでも楽しんでしまう黒田先生。山登りも楽しみのひとつだ。研究の合間に山に登っては、こんなところに高山植物がある、ここからあの湖が見えるんだ、さっきまでいたところがあんなに小さく見える、といろんな発見をしているという。「視点が上がると視界が広がる。それがうれしいの」

学生のアクティビティ①

私たち、第64回徽音祭実行委員会です！

11月9日(土)、10日(日)に開催される徽音祭(きいんさい)。徽音祭の開催の裏にはたくさんの徽音祭実行委員の努力が詰まっています。普段知ることのできない徽音祭の裏側を徽音祭実行委員のみなさんに聞いてきました。

Q1：どのような仕事を担当していますか？

Q2：実行委員をやるようになったきっかけは？また、実行委員をやっていてよかったと思ったことは？

Q3：徽音祭に来た方へ一言

- ① 企業からの協賛や、パンフレットへの広告掲載のお願い、パンフレットの編集、徽音祭全体の広報や装飾などを行っています。
- ② 渉外での仕事は「お茶大をPRする」仕事。なので、自分の所属している学部だけでなく、他学部や大学院のことなど、お茶大について広く知るきっかけにもなりました。お茶大のことをたくさん知る事で、愛校心も芽生え、実行委員をされていてよかったなと思います。お茶大は、共学校のように野球やラグビーの応援といった愛校心を高めるようなイベントがありません。だからこそ、徽音祭が愛校心を高めるきっかけとなるイベントになっているのではないかな、と思います。
- ③ 徽音祭の資金や景品などは私たち実行委員が集めてきています。そういった見えないところを気にかけてもらえるとうれしいです。また、当日はTwitterで徽音祭の様子を配信します。こちらもチェックしてみてください！



渉外部局長 若林 佑希



総務部局長 大塚 七星

- ① 模擬店や展示などに必要なレンタル備品の貸出し、使用場所の割振り、電力や衛生面の管理など、徽音祭の中でも裏の裏の仕事を担当しています。
- ② やる気があって実行委員になったわけではなかったのですが、1年生のとき、雨の中みんなで協力してテントを立てるなどの準備をするのがとても大変で、だけど楽しくて。それに、撤収作業で同期の実行委員と仲良くなり、この子たちとならぎっと楽しくやれると思い、実行委員を3年間続けています。
- ③ 徽音祭で出店している参加団体は全て半年以上の期間で準備をしています。外に出ている模擬店だけでなく、建物の中でもいろいろな趣向を凝らした企画を行っているのでは是非学内のいろいろなところを見て回って、たくさんの発見をしてください！

徽音祭のオススメ・見所は？

徽音祭での模擬店や発表、展示などは学生が半年以上かけて準備をしてきました。外に出ている模擬店だけでなく、教室の中でもいろいろな趣向を凝らした企画を行っています。是非学内のいろいろなところを見て回って、いろいろな発見をしてください！

また、徽音祭全体では「エコ活動」にも取り組んでいます。毎年、再利用できるエコ容器や干ばつ材を使用した割り箸を各参加団体に使用してもらうことで、環境への配慮にも気を遣っています



委員長 朝戸 裕理

—今年の徽音祭の見所について教えてください—

【鈴木】今までの徽音祭は「女の子」のイメージが強い企画が多かったと思うんです。でも、実際のお茶大生は様々な側面を持っている学生ばかりで、そういった色々なお茶大生の姿を、新企画の「お茶バラ～handsomeお茶大生を探せ!!～」や「ゼミ発表」などを通して、見てもらいたいと思っています。

【田中】模擬店や展示、発表など、どの団体も表に出ている部分だけな

く、面倒な会議や手続きなどを経て、みんなで協力合って準備をしています。当日は、その上で徽音祭を楽しんでいる学生の姿を見てほしいです。

【百瀬】イベントや模擬店だけでなく、装飾もかわいいものを準備しています。公募で決まったポスターデザインもとても可愛いですし、ホームページもポスターと雰囲気合わせたものになっているので是非チェックしてみてください。



副委員長 田中 美葉(緊急対応、シフト担当)



- ① イベント部局の中でも、ゲスト、ステージを担当しています。一見、華やかに見えますが、チケット販売や、机や椅子、備品の運搬など地味な仕事が多い部署です。
- ② 大変なことは多いですが、実行委員をやめる理由がないなと思い、3年間実行委員を続けています。私の担当している仕事は、他の仕事と比較して、お客さんの喜んでいる姿を直接見ることが出来る仕事です。実行委員での経験を元に、将来は人を楽しませる仕事がしたい、と思うようになりました。
- ③ お茶大ってどんな大学なのか、ということを微音祭をきっかけに是非知ってもらいたいです。また今年のテーマにあるように、何よりお茶大生自身に楽しんでもらいたいです。

イベント部局長 木村 真実(ゲスト・ステージ担当)

イベント部局長 乙村 瞳(企画担当)



- ① 1年生から3年生まで、総勢約30名でイベントの企画から運営までを行っている部署です。
- ② 1年生の時、漠然とステージ企画をやってみたくてと思い、イベント部局に入りました。大きくて華やかなステージをイメージしていたのですが、実際は想像よりもこじんまりとしていて…。その中でお客さんと一緒に楽しめるステージがとても楽しく、3年間実行委員を続けています。実行委員になってよかったと思うのは、打ち込めるものができたこと。自分たちで1から作り上げることが出来るのは実行委員ならではの、だと思います。
- ③ 微音祭のよいところは、学生の素の部分を見ることができるところです。また、木材やテントを運んで組み立てたり、配線を引いたり、力仕事もお茶大生だけで行っています。そんなお茶大生のたくましさも感じてもらえるとうれしいです。

微音祭のオススメ・見所は?

- 「ゼミ発表」…今まではあまりアカデミックなイベントがなかったのですが、お茶大生がどんな研究をしているかを様々な方に知ってもらいたいと思い、企画しました。受験生の方はもちろん、他大学の方や、お茶大生にもオススメです。
- 「お茶パラ～ handsome お茶大生を探せ!!～」…お茶大生の華やかな部分を見ることが出来る「水コン」とは逆に、お茶大生がもつ内面の「たくましさ」を是非ご覧ください!
- 「トークショー」…微音祭は今まで、トークショーのゲストが俳優さんばかりでしたが、今年は初めてアーティストのトークショーです!
- 今年は桜蔭会(本学同窓会)の方とも協力し、受験生向けのキャンパスツアーにも力を入れています! 卒業生と在学生とで、世代を超えてお茶大の魅力をお伝えします!

【朝戸】 お茶大は女子大なので他大学の方にとっては、あまり立ち入る機会のない大学です。微音祭は1年に1回、大学を広く公開している貴重な機会なので、「こんな人がいるんだな」とか、「こんな雰囲気のある大学なんだな」「こんな建物で勉強しているんだな」ということを感じていただければと思っています。微音祭を通して、お茶大について新しい発見をしてください。

一今年の微音祭の目標は?

【田中】 学内・学外問わず、多くの人に「お茶大」に興味を持ってもらいたい、というのが1番の目標です。ゼミ発表や、ミュージカル、歌やダンスなど色々な催しをしている中で、お茶大生はこういうことをしている人があるというのを知ってもらいたいです。



副委員長 百瀬 淳美(web、マニュアル担当)

【百瀬】 今年のテーマを、「Girls be Keen on "KIIN祭" ～お茶大にアツくなれ!～」にしたのも、お茶大のことや微音祭のことについて、まずは名前を覚えてほしいという思いからです。「『微音祭』ってどう読むの?」と聞かれることが多く、英語の「Keen」と微音祭の「kiin」をかけたテーマを設定しました。まずは微音祭をきっかけにリアルなお茶大の姿を知ってもらいたいです。

一微音祭に来た方に、一言お願いします。

【鈴木】 お茶大の正門をくぐって入ったときと、帰るときとお茶大のイメージが変わってもらえれば嬉しいです。「お茶大生って意外と〇〇だった」というのを1つでも持って帰ってください!

【朝戸】 実行委員や参加団体、色々な人の見えない部分での苦労や努力の積み重ねがありますが、まずは、純粋に楽しんでほしいなと思います。

【百瀬】 微音祭に来たお客さんではなく、私からは実行委員のみんなに。実行委員は当日とても大変だと思うけど、「楽しい大変」であってほしいと思います。達成感のある疲労を感じてほしいし、実行委員でよかったなあと思うような微音祭であってほしいと思います。



副委員長 鈴木 悠(会計、サポートスタッフ担当)

学生のアクティビティ①

学生のアクティビティ②

広報アテンダント、始動!

こんにちは! 広報アテンダントです。と名乗ってはみたものの、皆さんは広報アテンダントをご存知でしょうか? 広報アテンダントは、「大学広報のお仕事を体験する中で、『情報発信力』『問題解決力』『おもてなしの心』を身に付ける」という目標の下、今年の5月より活動を始めました。お茶大広報チームの方々や先生方のお力を借りながら、様々な形で学び、活動しています。

今号では、その幅広い活動内容をご紹介しますと思います。

広報アテンダントの活動内容

私たちは「大学の顔」として活動するために、ほぼ毎月各分野のスペシャリストをお招きして講習を受けています。最初の勉強会で前日本口リアル副社長にして本学学長特命補佐の坪田秀子先生から広報の基本を教わり、学生の立場から世の中にお茶大の魅力を伝えるための方法を学びました。本学のグッズを手がけるデザイナーの

伊藤透さんからはグッズの企画に関する基礎知識を、そしてセルフコーチングコンサルタントの早川優子さんからはキャンパスツアーに向けたマナー研修を受けました。



・勉強会・

ここで紹介するキャンパスツアーや、次ページで紹介する大学グッズの企画は、これらの学習の成果であるとともに、学生ならではの視点や発想を大切に活動です。発足したばかりなので試行錯誤の連続ですが、学んだことを実際に活かせるこの活動は、教わったことをただアウトプットするだけではなく、お茶大の魅力をど

う伝えるべきか、自分なりの答えを見つける作業でもあります。この勉強会は、今後ますます多岐にわたる広報アテンダントの活動の礎となることでしょう。

広報アテンダントとして、お茶大キャンパス内の各施設を、小中高生やその親御さんに説明しながら回ります。

歩くペースのばらばらな大人数の誘導、説明し始めるタイミングなどが難しく大変でした。しかも、来訪者にとって、広報アテンダントの態度はそのままお茶大生のイメージに結びつきます。そのプ



・キャンパスツアー・

レッシャーを感じつつ、笑顔を決やさず声のトーンを高く保ち、明るく見せようなど、気をつける点がたくさんあり

ました。勉強会のマナー講習で学んだことが活かされたと思います。

また、自分の学ぶお茶大の良さを直接伝えられる楽しさは大きかったです。最後にお茶大や学生生活、受験の不安などを質問・相談してくれたときも嬉しく、大学生の先輩として自分の成功体験や失敗談が受験生の参考に

なることの喜びも多々感じました。

・文教育学部写真モデル・

大学案内のための写真モデルをしました。数名で図書室の机に座って、教科書や本、PCを広げ談笑しながら勉強する様子を撮影しました。友達と視線を合わせればなしたかったので気恥ずかしかったり、カメラへの体の角度の取り方、自然な笑顔で、笑いすぎないようにしたりなど、細かい点が意外と難しかったです。



昨年好評だった
タンブラーに引き続
ぎ、今年も新しい大学
グッズを徽音祭にて販売
します。徽音祭で販売され
る大学グッズは、私たち広
報アテンダントが企画立案
から販売まで手掛けたも
のです。

グッズ開発が始動した
のは、梅雨明けが間近と
なった6月。1ヶ月後に設
けられたプレゼンテーションに向け、広報アテンダント全7チーム
が新たな大学グッズを提案することとなりました。

徽音祭で販売されるということで、学内生だけではなく、来学さ
れる多くの方々の手に取っていただけるよう、各チーム念入りな
ミーティングを重ねプレゼンテーションに備えました。

実用性はあるかな。デザインはどうしよう、可愛いのがいいね。
でも、なによりもきちんと使ってもらえるだろうか…。ターゲット
は？ 販売時期も考えないと…。

オープンキャンパスに来学した高校生にアンケートをとったり、
製品を作っている会社に問い合わせをしたり、よりよいグッズを企
画しようと試行錯誤しました。各
チームが大変忙しい1ヶ月を過ご
したように思います。

プレゼンテーション当日は、広
報チームや生協の方だけでな
く、デザイナーの伊藤透さ
んや勉強会でもお世話



新☆大学グッズ 製作の裏側

になっている坪
田秀子先生をお招き
し、発表を行いました。
各チームが各自の提案
する新グッズの良さをア
ピールするため、様々な工
夫を凝らした発表を行い、
とても興味深い時間となり
ました。

パワーポイントに画像
を載せてイメージしやすく
したり、シヤレや小芝居を

取り入れてみたり…。実際に実物を見てもらえれば簡単ですが、言
葉で説明するとなると表現が難しいもの。聞き手に分かりやすく伝
え、理解してもらうことの大変さを実感しました。

一方で、企画することの楽しさに気付いたという声もあり、就職
活動をする上で企画職への関心が湧いたという学生もいました。
時間が限られた中での企画でしたが、多くのことを学ぶことが出来
ました。また、将来への視野も広がり、一言では言い表せない素敵
な経験でもありました。

今回はグッズ企画という広報の一面に携わりましたが、勉強会を
始めて広報とは奥の深いものだ実感しています。

現在、ブックカバー・マイ箸・バッ
グハンガー・弁当箱が商品化され、
PRに向けて活動中です。徽音祭で
より多くの方のお手に取って
いただけるよう、今後の広報活
動にも力を入れていきます。



～ 最後に ～

GAZETTEの「学生のアクティビティ」ページは、これからは、私たち広報アテンダントが
執筆していきます。読者の皆さまに今後ともお付き合いいただくにあたり、まずは自己紹介
の意味を込めて、広報アテンダントの紹介をさせていただきました。

9月に7年後の東京オリンピックの開催が決まりましたが、招致委員や選手といった方々による
プレゼンテーションなど、その招致活動にも大きな注目が集まりました。広報活動の力を
目の当たりにしたニュースでした。

私たち広報アテンダントも、学生の視点を活かしながら、より効果的に、より広く、「お茶大」
を発信していきたいと思えます。GAZETTEに留まらず様々な媒体を使いながら、学生の
生の声を伝えていきます。

今後とも、どうぞよろしくお願ひいたします。

学生のアクティビティ②

本学の新しい取り組み

本学は、「学ぶ意欲のあるすべての女性にとって、真摯な夢の実現される場として存在する」という目標に基づき、様々な教育プログラムや研究支援制度などを制定してきました。

最近では、平成24年に「グローバル人材育成推進事業・タイプA(全学推進型)」、今年(平成25年)に「博士課程教育リーディングプログラム【複合領域型(横断的テーマ)】」が採択されました。

グローバル人材育成推進事業

平成24年度「グローバル人材育成推進事業・タイプA(全学推進型)」に本学プログラムが採択され、今年度より、ACTプログラム(Advanced Communication Program)を始めとした外国語カリキュラムの改革、留学機会の拡大、グローバル力育成の取り組み等を行っています。本事業の一環で、8月に本学でサマープログラムを実施いたしました。



サマープログラム

今年で3回目となる、「英語によるサマープログラム」が、8月1日(木)～9日(金)の9日間にわたって開催されました。本プログラムの実施は今年で3年目となりますが、海外協定校からの受講者は55名、国内(お茶大、国内協定校)受講者53名とあわせて100名以上、参加者国籍は計18カ国の大所帯のプログラムとなりました。プログラムでは3つのテーマ(社会科学、自然科学、文学・建築学・芸術学)のクラスに分かれて、英語での講義やディスカッションが行われ、課外では各テーマの内容に関連したフィールドワークも実施されました。

また、今夏から、本学初の「日本語のサマープログラム」も実施。海外の協定大学で日本語を学ぶ学生を対象にしたプログラムでしたが、多数のお茶大生もボランティアとして参加し、各国からの参加者と交流を深めました。本プログラム終了後もSNSなどを利用した友情が続いています。

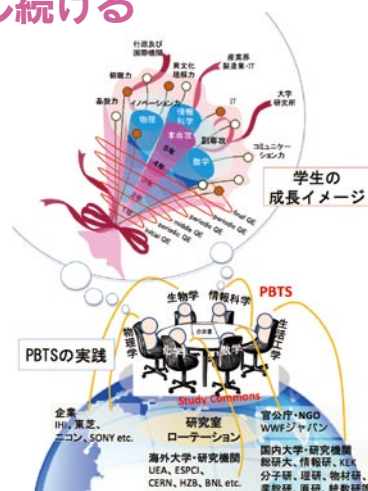
「グローバル人材育成推進事業」は、若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる人材の育成を図るべく、大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を推進する事業に対して重点的に財政支援することを目的としており、本学を含む11大学が全学推進型に採択されています。

『「みがかずば」の精神に基づきイノベーションを創出し続ける理工系グローバルリーダーの育成』が採択されました

『「みがかずば」の精神に基づきイノベーションを創出し続ける理工系グローバルリーダーの育成』は、博士前期課程から後期課程の5年間一貫教育プログラムで、海外・企業等への長短期「研究室ローテーション」に派遣を行うプロジェクトです。

本プロジェクトでは、理学専攻とライフサイエンス専攻の博士前期課程に入学する大学院生の中から毎年15名程度を選出します。

「Project Based Team Study (PBTS)」というチームスタディでは、異なる分野の大学院生数名からなるグループで、自主課題を設定し、それぞれの専門分野をベースに研究し、その結果をグループ全体で成果としてまとめあげます。このPBTSを中心にプロジェクトを進めていきます。募集要項を含め、詳細は今後大学ホームページ等で発信しますのでご確認ください。



博士課程教育リーディングプログラムは、文部科学省が全国の国公立大学を対象に募集していたもので、「優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたリグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進すること(公募要領より)を目的としています。本学は【複合領域型(横断的テーマ)】で応募し、応募17大学中で採択2大学という狭き門でしたが、東京大学とともに採択されました。

今回は、大学院人間文化創成科学研究科人間科学系教授の浜口順子先生をご紹介します。
浜口先生は、大学院では人間発達科学専攻保育・児童学コース、また学部では生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座のご所属です。

お茶大の「子ども学」をリレーする



Hamaguchi Junko
浜口 順子

Q. ご出身、ご経歴などについて教えてください

生まれたのは米国なのですが、3歳10か月から鎌倉、横浜、東京などで育ちましたので、日本の普通の教育を受けています。大学は、お茶の水女子大学家政学部児童学科に入りました。子ども時代を思い出すことが好きだったので、働く女性が増える中で保育の問題はこれから重要だと周りにアドバイスされたこともあり、決めました。

Q. 当時のお茶大は？

学生運動から10年ぐらい経過したノンポリ（政治的無関心）の時代でしたが、今よりも政治や社会の動きに関心のある学生はまだ多かったと思います。

当時の児童学科というところは学際的総合的な教育を目指していて、先進的でユニークでした。「子ども」をテーマに、医学、心理学、比較行動学、法学、児童文化学など多分野の先生がいらっしやいました。その中で学生自身が「自分の」児童学をさがすことを問われていたと思います。だから興味があることを何でも追究できる自由さがありましたが、それだけ厳しかったともいえます。今も発達臨床心理学講座の授業に残っているインターンシップ（3年次）では、特別支援学校に通って、そこでの実践が卒論のテーマでした。

Q. 大学院時代はどのように過ごされたのですか？

その後、本学の大学院修士・博士課程まで進みました。博士課程に入ってからすぐにオランダへ2年間、留学しました。当時、津守真先生が指導教員で、先生ご自身がオランダの現象学的教育学に刺激を受けていらしたのです。留学は米・英国などの英語圏も考えましたが、教育学をするならあまり大きな国に行かないほうがいいと言われました。オランダは小国ながら、オランダ語というマイナーな言語を守り、独自の文化と高い教育水準を築きあげた国です。留学中は、オランダ語を学びながら現地の子どもと遊び、大変ながらも面白かったです。

Q. ご自身の子育て経験は保育・児童学研究にどのようにつながっているのでしょうか？

留学から帰国し、博士課程を満期退学し、

結婚、出産。夫が大分に転勤となった2年間、非常勤もできず専業主婦になりましたが、今思えば本当に貴重な楽しい時間でした。それでも、どこかキャリアへの焦りもあったと思います。

子育ては、児童学を勉強したから大丈夫かなと高をくくっていましたが、そんな甘いものではなく、1人目の子どものときなどは訳のわからないことばかりでした。でも2人目、3人目になると、子どもも人生も思い通りにはならないことが身に染みてきて、だんだん人並みの親になってきたかもしれません。子どもには申し訳ない気持ですが、保育学の研究に戻って、この経験が生かされていると思います。

Q. 現在の研究内容について教えてください

学生時代に障害のある子どもとじっくり過ごした経験が根っこにあるせいでしょう、子どもの視点に立つことが、大人の関わり方をふれにくくするというには確信があります。子どもに迎合するのではなく、大人と子どもは違うんだということを出発点にして関係性を築くのです。そういう子どもと大人の関係性が研究テーマです。

9年前にお茶大に就職してからは、日本で最古の国立幼稚園である附属幼稚園と、国立大学法人として唯一自主運営をしているいずみナーサリーがあるので、子どもたちを自由に観察させていただく機会が多く、また保育者の先生たちと話し合いなどもできるので恵まれていると思います。

平成22年度から、特別経費による「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」事業（略称ECCCELLエクセル）という教育研究プロジェクトを進めています。保育や子育てをテーマに保育現職者や社会人のための夜間授業やシンポジウムを開催したり、保育者養成関連の授業改革、附属園との共同研究などしながら、学外との関係も広がっています。また『幼児の教育』という明治34年創刊の

雑誌を附属幼稚園と協同して発行し続けています。東基吉、倉橋惣三、津守真先生、本田和子先生など歴々の「子ども学」研究者がリレーでつないできた雑誌です。創刊号からのバックナンバーを附属図書館のHPからダウンロードして読むことができます。貴重な歴史的資料ですので、ぜひ検索してください。（TeaPot / 幼児の教育）

Q. 今のお茶大の印象とメッセージをお願いします

お茶大生は、もちろん母親になる可能性があり、また職場や地域などで子育てする人を、直接間接に多様な形でサポートする役割を担っていくべき人です。たとえば、育児を理由に休んだり早退したりする同僚を気持ちよく送り出せるような職場環境を作ることに、知恵や社会性を発揮してほしい。お茶大は、子どもを育てることが楽しいと思える社会を作ることにも貢献する学問や経験を積み場所だと思います。お茶大生はまじめで、どんな親になるべきか、どう子どもを育てるべきか、と「べき」ばかりでものを考えがちです。ゆったりと目的なしで子どもと遊ぶ時間をもって、一見ばからしく思えるような子どもの言動や発想の面白さ、真摯さをまじめに受け止められる視野を育ててください。でないと、その子らしさや、子どもならではの新鮮な知のひらめきを摘みとるばかりの大人になってしまうでしょう。それは、社会的にも大きな損失だと思います。

文責：刑部 育子
（大学院人間文化創成科学研究科人間科学系准教授）

附属学校園からのお知らせ

附属中学校便り



講堂発表する3年生

附属中学校では教育課程の中に、課題の追究・解決の力を育てる「自主研究」を位置づけています。昭和50年代(1980年頃)に「ゆとりの時間」が時間割の中に組み込まれた頃に設定され、35年以上の取り組みをしています。2009年度から2011年度までの3年間は研究開発学校

の指定研究として「自主研究」を中心とした研究に取り組みました。これまでの実践をふまえさらによりよい時間となるように研究を進めました。1年前期は自分の興味・関心を見つける「探究基礎Ⅰ」、後期に研究方法の基礎を学ぶ「探究基礎Ⅱ」、2年前期は実際に研究を進めながら方法を学ぶ「探究基礎Ⅲ」で2・3年生合同のグループ編成です。2年後期からは「卒業研究Ⅰ」3年前期で「卒業研究Ⅱ」とじっくり時間をかけて自分で設定したテーマを研究しまとめに向けてます。各学年終了時には、学年発表会を行います

個性を磨く自主研究

が、「卒業研究Ⅱ」終了時には優れた研究を行った3年生がグループの代表として、徽音堂で全校生徒の前で自分の研究をプレゼンテーションします。今年は9月6日(金)に行いました。発表者のテーマをいくつか挙げると、「文房具～あつたらしいなを叶えます～」、「音楽で本当に人の心情・行動は変わるのか」、「手話で世界を広く」、「人を操る～脳と心理の落とし穴」、「紙にできた折り目はどうしたら消せるのか」など様々なきっかけで取り組むことになった全部で12名が発表しました。



発表メモをとりながら熱心に聞いている

第47回生徒祭開催! 「夢-DREAM」 天候に恵まれ3000名を越える来場者



3年生の学年合唱(通路に台をおいて指揮)

9月21日(土)、22日(日)の2日間にわたって開催いたしました。21日の午前中は徽音堂に於いて「オープニングセレモニー」と称して生徒祭実行委員会企画のイベントを始め、今年初めて3年生全員が「大地讃頌」の合唱で参加しました。2年生からは夏に行った林間学校についての報告会も。もちろん演劇部、ダンス部、吹奏楽部の発表がステージを飾りました。午後からは一般公開が始まり多くの方が訪れまし

た。中庭・ピロティでは中学校では珍しい飲食物の模擬店・屋台の出店があり、中庭の特設ステージで行われているイベントを楽しみながら召し上がっていました。

この日を迎えるために、生徒達は



テーマ発表の瞬間(5月)

生徒祭実行委員会を組織し5月の生徒総会でテーマを「夢-DREAM」と決定。このテーマをいかに活動計画をたて、1年生は学級単位で、2年生3年生は「自主グループ」と呼ばれる任意のグループで活動します。それまでには、テーマに沿って企画を



1年生のクラスで取り組んだ劇の公演

附属学校園での出来事 (2013年7月～10月)

【いずみナーサリー】

7月

- 親子ふれあい遊びの会
- 夏野菜カレーパーティ

8月

- すいかわり
- ECCELLサマーフォーラム事例提案
- 第16回ハーフミラー参加

9月

- 避難訓練(引き取り訓練)

10月

- 食事の懇談会

【附属幼稚園】

7月

- 始業式
- 5歳児サンシャイン水族館見学
- 誕生会・七夕
- いきもの博物館
- 1学期終業式
- 夏季休業日始め
- 年長組親子飼育栽培のため登園(希望者のみ)

8月

- ECCELLサマーフォーラム事例提案
- 第16回ハーフミラー参加

9月

- 2学期始業式
- クラス懇談会
- 誕生会
- 避難訓練(3歳児・4歳児小学校校庭で引き取り訓練)
- 保護者対象講演会
- 4歳児遠足(国立科学博物館)

10月

- 運動会
- JICA中西部アフリカ研修生来園

【附属小学校】

7月

- 委員会活動、運営委員会
- 花まるの会(かがみ会主催校内講演会)
- 附属中学校のお話を聞く会(5年)
- 榊原先生講演会(1年保護者)
- 防犯教室
- 1学期終業式
- 夏休み開始日

8月

- 登校日(4・5・6年)
- 林間学校(4・5・6年)

9月

- 2学期始業式
- いじめ防止講演会(5年)
- いじめ防止授業(5年)
- 不審者対応訓練
- 関東附属校対抗ソフトボール大会
- 水泳終了
- 校外学習(1年)
- 開校135周年記念日
- 引き取り訓練
- 学校説明会

10月

- 衣替え
- 校外学習(1年)

【附属中学校】

7月

- 第2回学力テスト(3年)
- 貧血検査(3年)
- 全学年保護者会
- お茶の子バザー
- 志賀高原林間学校(2年)
- 夏休み開始

8月

- 夏休み終了
- 教育実習開始

9月

- 第3回学力テスト(3年)
- タイ国教育視察団来校
- 郊外園(2年)
- 自主研究講堂発表
- 授業参観日
- 生徒祭

10月

- 前期期末テスト
- 前期終業式
- 秋休み
- 始業式、後期開始

【附属高校】

7月

- 農場実習(ジャガイモの収穫・2年)
- 学力テスト(1年)
- 保護者会・保護者懇談会
- 1学期終業式
- 夏季休業
- クラブ合宿

8月

- 東工大サマーチャレンジ
- アジア・エコリーダーズ生徒派遣
- 学力テスト(3年)

9月

- 2学期始業式
- 学力テスト(2・3年)
- スタディーサポート(1年)
- 文化祭
- 学校説明会
- 進路講演会(1年)
- 秋季身体計測
- 自治会選挙

10月

- 2学期中間考査
- 台湾生徒研修旅行



社会人を交えての自主研究ラウンドテーブル

3年後期の「卒業研究III」では、「ラウンドテーブル」と称して、1・2年生そしてご協力いただける社会人に対して、6・7名のグループで3年生が自分の研究を振り返って、良くできた点やこうすればよかった点、後輩へのアドバイスなどを語る会を行いました。特に初めて出会う大人の方にお話しをすることは、良い意味での緊張感をもたらしながらも、良い経験になったようです。



自主研究での実験

立てメンバーを募り、生徒祭にふさわしいかどうかの「厳しい」審議を通して許可されたものだけが活動できます。とは言ってもとても楽しい企画ばかりでした。ダンス部や文化系の部活動も3年生はこの生徒祭で引退になります。盛り上がりと節目を併せ持った行事です。



科学部による公開実験

附属学校園からのお知らせ

キャンパス点描

オープンキャンパス2013を開催しました



学部オープンキャンパスを7月13日(土)～15日(月・祝)に開催しました。連日の猛暑の中、7,000名を超える受験生や保護者の方々にご参加いただきました。

全体説明会では、羽入佐和子学長からお茶大の紹介と受験生へのメッセージ、続いて耳塚寛明教育機構長から入試制度や教育プログラム、奨学金、学生寮などについての説明があり、その後、各学

部長による学部・学科の説明がありました。

全体説明会後には、各学科・講座・コース別に、模擬授業や在学生による相談、研究室ツアーなど工夫を凝らしたプログラムが行われ、参加者から活発な質問が飛び交いました。

各学科・講座・コースでの質疑応答や模擬授業のアシスタント、オープンキャンパス全体の受付・案内などは本学の学生が担当し、受験生や保護者からの質問に熱心に答える姿も。受験生からも、実際に大学生の声が聞けて、お茶大のことがさらによく分かった、との声もいただきました。また、受付では、熱中症対策にお茶大オリジナルの水(非売品)も配布しました。



四女子大学共催イベント

女子中高生のためのサイエンスフェスティバル 開催

8月31日(土)に四女子大学(※)共催イベント「第7回 女子中高生のためのサイエンスフェスティバル」がお茶の水女子大学で開催され、240名を超える参加者がありました。

特別講演は「南極で越冬しました!」というテーマで、礒野靖子さん(名古屋大学)から、南極は一体どんなところなのか、昭和基地でどんな生活をして一年間を過ごしたのか、どんな仕事をしてきたのかなどなど、現在の南極の様子や観測隊の姿などについてのお話があり、会場の参加者には大変好評でした。

四女子大学の卒業生によるロールモデル講演会では、さまざまな分野で活躍する卒業生から、理系に進んだきっかけ、学生時代のエピソード、現在の仕事の内容など興味深いお話があり、女子中高校生の皆さんには大変参考になったことと思います。



四女子大学の学部生・大学院生との交流コーナーでは、数学、情報、物理、化学、生物の分野に渡る研究内容の紹介があり、生の研究に触れることができました。

また、ソニー株式会社による「ソニー・サイエンスプログラム for ガールズ」が同時に開催され、15名的女子中高校生が「光通信」をテーマに、はんだを使用した本格的な工作を体験しました。

参加者の満足度が高いプログラムとなりました。

※ 四女子大学・・・お茶の水女子大学、津田塾大学、東京女子大学、日本女子大学(五十音順)





他にも、入試情報質問コーナーやカリキュラム・資格取得質問コーナーなどでは、相談に来た学生・保護者の方で賑わっていました。今年から、グローバル力強化コーナーや学生寮SCC紹介コーナーを新たに設置。先生方の留学体験トークや、SCCで寮生活を送る学生との相談などが行われました。

来年度も引き続きオープンキャンパスを実施いたします。開催時期がまきましたら、大学ホームページでお知らせいたします。



小野 亜美さんがグローバル人材育成推進センター ロゴマークデザイン賞を受賞



この度、小野亜美さん(大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程ライフサイエンス専攻1年)がグローバル人材育成推進センターロゴマークデザイン賞を受賞し、8月20日(火)に表彰式が行われました。

この賞は、本学が文部科学省の補助金により実施するグローバル人材育成推進事業(平成24~28年度)運営の中核組織として、平成25年3月1日に設立されたグローバル人材育成推進センターのシンボルとしてふさわしいロゴマークデザインの考案者に対して贈



表彰式の様子



(左より) 小野さん、羽入学長、河村センター長

られるものです。本学学生、教職員からの公募により5名・計8点の作品が寄せられ、厳正なる選考の結果、小野さんに受賞が決定しました。優勝作品には本学英語表記名「Ochanomizu University」が付され、公式ロゴマークとしてお目見えます。

表彰式では羽入佐和子学長から賞状が、続いて河村哲也センター長から賞品が授与されました。式後には学長、センター長が小野さんと和やかに歓談されました。

グローバル人材育成推進センターについては、ホームページをご覧ください (<http://www.ocha.ac.jp/intl/ocgl/index.html>)

キャンパス点描



キャンパス風景 提供:お茶の水女子大学写真部

編集後記

卒業生紹介(3-4頁)

文章全体から黒田先生の魅力を匂わせたい!と思いつき始めました。力不足を感じることもありましたが、エキサイティングでエレガントな体験になったと思います。ありがとうございました。(渡邊)

黒田先生はチャームिंगな方で、お話をきいていて元気をもらえました。いろんな方に読んでいただくということドキドキでしたが、楽しく記事を書くことが出来ました!またこのような企画に参加することが出来るとても光栄に思います。(我喜屋)

学生のアクティビティ②(7-8頁)

みんなで執筆して二つの記事をつくるのは、楽しかったし達成感がありました。私たち広報アテンダントの活動や想いが、皆さまに上手く伝わっていただければ幸いです。(森)

台風接近でミーティングが潰れるなど、時間がない中での作業でしたが、ネットを使って話し合いながら記事を作り上げていく過程はとても刺激的でした。貴重な体験をさせていただき、感謝しております。(田中)

様々な学部・学科から集まった広報アテンダントのメンバー。キャラクターも様々な記事にするネタに対しても皆違う視点で、とても刺激を受けました。(遠藤)

「ライターのようなことをやってみよう」というちょっとした好奇心から挑戦した記事作成でしたが、各メンバーの持ち味がうまく発揮された内容になりました。一人では絶対にできない体験ができました。ありがとうございました。(寶田)

お茶の水女子大学学报 第238号

▽発行日:2013年11月9日

▽発行:国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚2-1-1(〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail:info@cc.ocha.ac.jp

URL :http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学报「GAZETTE」は、
 本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。